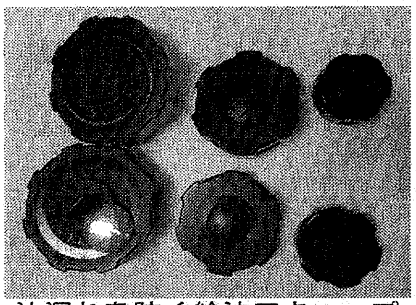
油漏れを防止する

給油キャップ「ナイスキャップ」発売

センターインコーポ

㈱センターインコーポレーション（埼玉県行田市壱里山町24の1・メゾンラベンダー8番地305）は14日、本社において記者会見を行い、ガソリン・軽油・灯油の燃料タンク内からの油漏れを防ぐ革新的な給油口キャップ〝ナイスキャップ〟各種と、コンクリート・アスファルトなど境界面の雑草・汚泥を除去する刈払機用ステンレス製刈刃〝エス・アイ・シー・オリジナルディスク〟〝ナイスカッティング〟（詳細次号）を発表、本格的な発売を開始することを明らかにした。〝ナイスキャップ〟は、同社独自のボール・ベン・ネジタイプの、それぞれの防止機構により、燃料タンクからの油漏れをシャットアウトし、外気へ気化する燃料をタンク内に戻す。これにより、安全性を高め、燃料の節約、環境汚染の防止につながる。

記者会見では、同社・仲内隆夫社長が〝ナイスキャップ〟の開発経緯を発表。それによると、トラックの燃料タンク、農業機械などの燃料タンクの給油口キャップは、タンクの膨張を防ぐため、気化した燃料を外気に逃がす、隙間や穴が施してある。その穴を通して、自然に気化する軽油・ガソリンは相当な量にのぼるといわれている。このため、トラック運転手は、給油口に軍手を被せ、自然気化する燃料を、できるだけ少なくする対策をとっている。漏れた燃料は、発火の危険性もある。



油漏れを防ぐ給油口キャップ「ナイスキャップ」

トラクタ・コンバインなどの農業機械も、作業をしない期間に、多くの燃料が損失される。また、傾斜地や凹凸のある不整地の走行・作業では、揺れで、燃料が漏れだす場合もある。芝刈機作業で、燃料漏れがグリーンに致命傷をあたえた事例もある。

このことから、同社では国内のエンジニアリング会社と協力し、これまでにない新発想の給油口キャップ〝ナイスキャップ〟を開発。独自の燃料漏れ防止機構・ボールタイプ（小さな金属ボールを内蔵）、ベンタイプ（圧力で傘状にオープン）などにより、気化した燃料を内部に保留し、タンク内に戻す。また、内蔵したスポンジにより、揺れなどで外部に漏れだす燃料を防止する。

これにより、作業中・停止中にも燃料が外部に漏れだすことがなく、燃費の節減になり、安全性の向上につながる。

また、傾斜地作業の燃料こぼれ対策として、タンク口金の高さを変えるなどの、追加加工の必要もなくなる。すでに、環境対策から燃料気化を厳しく規制する米国・カリフォルニア州において、同キャップの使用が検討されている（米国特許取得済）。

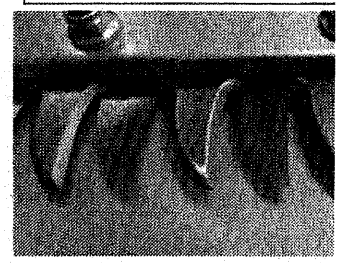
同キャップは、トラック用の防犯効果の高い鍵付タイプから、汎用エンジンに合うサイズのキャップまで各種取り揃えている。

「燃料の節約、安全性の向上、環境汚染の防止など、ナイスキャップは大きなメリットがある。エンジンメーカー、農機・建機メーカー、また、トラック運送業界など幅広い分野にPRを進め、量産によるコストダウンを図っていきたい」と仲内社長は話している。

問い合わせは同社（☎048・553・1887）へ。

冷間鍛造技術を駆使し

新技術の曲線刃ブレード



㈱源平刃物工場（松尾勝彌社長・兵庫県三木市細川町脇川455の121）は、バリカン式ヘッジトリマーなどの機械刃物専門メーカーとして知られているが、中でも炭素工具鋼（SK鋼）や合金金具鋼（SKS鋼）をはじめとする特殊鋼の熱処理技術は定評で、手打鎌の製造時から脈々と受け継がれる焼き入れ技術に、近代的な熱処理技術を付加した、独自の技術を有している。

また日頃から刃物の切断機構の解明に努め、用途に合った構造・機能を有した、より切れ味を発揮できる刃物を目指し研究開発を進めている。

同社では独自に開発した「衝撃強度試験機」や「摩耗試験機」により、熱処理技術の高度化を図ったメカニズムを解明するために、高速度カメラを導入し、新たな形状の刃物を試作する時や既成の刃物を改良する時など、スローモーション映像で切断物の動きを確認しながら切れ具合を検証。その結果を設計へフィードバックする。

生まれた新技術は数多く、独特の形状をもつ「曲線刃」もその一つ。同社の保有技術である「冷間鍛造技術」を駆使して、1枚1枚の刃を剪定鋏のように、曲線で仕上げたものだ。

これを装着したヘッジトリマーは、より形状を応用したバリカン式線形作業機。また、線形作業は専門家でも容易にできる。

26・27年の需要見通し

27年は103%

安全啓発活動を更

日農工刈払機部会【刈払機部会】（永尾慶昭部会長）

永尾部会長

平成26年1～9月の部会統計では、出荷実績は前年比で、農機店向けが109%、ホームセンター向けが103%、全体では105%で推移している。刈払機は天候の影響を受けやすく、当用買い傾向の強い製品だが、今年は夏場の長雨の影響があり、また、農家の規模拡大などから、草刈り作業面積が増え、自走式畦草刈り機にニーズがシフトしていること、ホームセンターでは手軽なバッテリー式刈払機のニーズが高まるなどの影響を受けている。消費税増税に関しては、多少の駆け込み需要はみられたものの、小額商品のため、他の大型機種と比べ、比較的影響が少なかったと受け止めている。

最近の傾向として、一般消費者のユーザーに加え、農家のホームセンターへの移行も増えてきており、ホームセンターでの販売割合が年々増加し、低価格化と高性能化の二極化が進んでいる。

26年の見通しは昨年の農機販売店向けの落ち込みが回復し、ホームセンターの掘り起こ

ムセンター向けが10の需要が27年の場合と同品の販売の高進んで操作かつ及や